

## 悲観性の二側面と達成動機との関連について：比較文化的視点から

|         |   |
|---------|---|
| 著者      | 福沢 愛  |
| 学位授与年月日 | 2015-03-24  |
| URL     | <a href="http://doi.org/10.15083/00007991">http://doi.org/10.15083/00007991</a> |

(別紙 2)

## 審査の結果の要旨

氏名 福沢 愛

本論文は、比較文化的な視点から行った実証研究にもとづき、悲観性が達成動機に及ぼす影響について、新たな知見を報告するものである。これまでの研究において、日本人はとくに欧米人と比較して、より悲観的であるという結果が得られていた。また、一般的に悲観性と達成動機との間には負の相関があることが知られていた。一方、日本人の達成動機は決して低くない、ということもよく知られている。そこで、本論文では、一見矛盾する悲観性と達成動機との関連について、システマティックな研究を行い、合理的な回答を導き出している。

まず、第一部では研究 1 と 2 において、楽観性および悲観性と達成動機との関連について探索的な研究を行い、日本人と欧米人では、楽観性および悲観性のどの側面と達成動機と関連するかが異なっていることを見出している。悲観性を能力などの内的要因に対する悲観と、運や偶然といった外的要因に対する悲観の二種類に分け、達成動機との関連を調べたところ、日本人でもアメリカ人でも、内的要因への悲観が低いほど達成動機が高いことが分かった。しかし、日本人の間でのみ、外的要因への悲観が高いほど、達成動機が高いことも明らかになった。

そこで、第二部において、まず研究 3 と 4 において日本人について、悲観性と達成動機との関連についてパス解析によって分析した。その結果、日本人の間では、内的要因への悲観性が高いほど、達成動機が下がっていることが分かった。一方で、外的要因への悲観は、外的要因に対する悲観性が高いほど達成動機が高いということを見出している。研究 5 において、このような傾向がアメリカ人の間でも見られるかどうかを調べたところ、アメリカ人でも、能力などの内的要因への悲観はしない方が、コントロール感を高く持つことができ、積極的方略や達成動機が高くなるということが確認できた。しかし、アメリカ人の間では、日本人と異なり、外的要因への悲観は、達成に関するどの変数との間にも有意な関連を持たなかった。

最後に、研究 6 において、日本人の間では、アメリカ人と異なり、心理的 **well-being** を保つという面においても、外的要因への悲観が適応的であることを日記式調査によって確認している。これらの結果から、日本人にとってのみ、外的要因への悲観が、心理的 **well-being** を保ちつつ達成動機を維持することができる悲観であるということが分かった。

以上、本論文は悲観性と達成動機に関する新たな知見を提供しており、日本における悲観性研究の進歩に大きな貢献をするとともに、比較文化研究にも大きな影響力をもつものである。とくに、日本人の場合には、欧米人と異なり、悲観性でも外的要因に関するものは、必ずしも不適応なものではないという知見は、精神衛生にもかかわる重要な知見である。よって、本審査委員会は本論文が博士(社会心理学)の学位に値するものと判断する。